

令和 4 年 6 月 20 日現在

機関番号：34418

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00362

研究課題名（和文）語りの変遷—『夷堅志』の新しさ

研究課題名（英文）Evolution of Storytelling: Finding the New Literary Value of "Yijianzhi"

研究代表者

安田 真穂 (Yasuda, Maho)

関西外国語大学・英語国際学部・准教授

研究者番号：70351559

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、南宋の洪邁『夷堅志』（全約420巻、現存は207巻）を研究対象とし、基礎作業として国内外から十五種類もの版本を集めて校勘補訂を行った上で、所収の各話について歴史書や地理誌などと照合せながら詳細な注を付し、精緻な全訳を付けた。この成果は『『夷堅志』訳注 乙志下』と同『丙志上』として公刊した。『夷堅志』の全訳注出版は本邦初である。巻末には「人名・地名・分類索引」を付し、文学の他、歴史、民俗学など多分野の研究者にも利便性の高い書籍とした。更に各巻末に『夷堅志』の新しい文学的価値について論じた解説論文を掲載し、また学会や学術雑誌などにも『夷堅志』が持つ特異性についての研究成果を発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本邦初の『夷堅志』の全訳本である『『夷堅志』訳注 乙志下』と同『丙志上』の二冊を出版したことが最も大きな研究成果である。15種類ものテキストと文字を校勘した上で、最適な本文の再構成を試みた。更に歴史書や地理誌などを調査し、各話に詳細な注を付した。また巻末に人名・地名・分類索引を付することで、文学のみならず他分野の研究者たちの研究資料たり得るよう配慮した。更にこれらの精読を通じ、志怪書でありながら歴史書に引用されるなど歴史学的にも価値のある書籍であること、また商業が発達してきた宋代の人々の生活や街の様子などを活写しており、史料としての価値が高いことを指摘し、論文や口頭発表などにて明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on "Yijianzhi" by Hong Mai of the Southern Song dynasty (approximately 420 volumes in total, of which 207 are in existence). Our research group collected as many as 15 versions from Japan and abroad as the groundwork and meticulously translated them while adding detailed notes and checking each tale in the collection against history books, geography journals, and more. The result has been published as an annotated translation of 20 volumes of "Yijianzhi". This is the first publication of a complete Japanese translation of "Yijianzhi" with notes. We added an index of names of people, places, and categories at the end of each volume, thereby making this a highly convenient book for researchers in various fields, such as literature, history, and ethnology. We also provided articles discussing the new literary value of "Yijianzhi" at the end of each volume and presented studies on its uniqueness in academic conferences and journals.

研究分野：六朝唐宋小説

キーワード：夷堅志 太平広記 六朝志怪 唐代伝奇 宋代志怪 建炎以来繫年要録 異人 中国地方誌

1. 研究開始当初の背景

(1) 前回の科研費研究課題「『夷堅志』の総合的研究」

本研究は、平成 27 年度～平成 29 年度に採択された「『夷堅志』の総合的研究」(課題番号:15K02445、研究代表者:安田真穂)において、『夷堅志』を様々な歴史書や地理志などと比較検討しながら精読を進めていく中で、所収の各話が志怪小説の枠組みに留まらない、より通俗性や娯楽性の高い読み物として変容を遂げているのではないかという気付きから始まった。『夷堅志』は従来、文学的観点からは唐代伝奇小説に比べて発展性に欠け、小説的価値が低いと考えられてきた。しかし、それは「事実を書き起こす」という性格を持った志怪小説という枠組みからの視点であり、従来の『夷堅志』研究がそこにのみとられすぎていることに疑問を持つに至った。

そこで今回は、新たにその「『夷堅志』の新しさ」について、従来の小説的価値観に留まらない文学的視点と、歴史学や民俗学的な視点からも、多角的にもっと大きな視点で『夷堅志』を捉えていく必要があると感じ、今回新たな研究テーマを設けるに至ったのである。

(2) 学界において『夷堅志』に注目が集まっていること

そもそも『夷堅志』のこれまでの評価は、唐代伝奇小説に比して発展性に欠け、小説的価値が低いと考えられてきた。しかし、精読してみると、唐代までの話のパターンを踏襲せず、わざと使い古された決まった型を崩すような、独自の展開を見せる話が多く散見された。しかも一見従来の志怪小説と同じような怪異の実録を標榜しながらも、その実、奇事異聞の面白さを持った、人々の興味を惹くストーリー性がある話も多い上に、また歴史家でもある編者洪邁のジャーナリスト的な精神が見え隠れするような話もある。このような見地から、歴史学的にも民俗学的にも価値のある史料が含まれているのではないかという、新たな視点を見つけることができた。

更に昨今、国内外において『夷堅志』に関する研究が数多く発表され、文学に留まらない各分野からの高い関心が集まり始め、特に宋代の社会状況を読みとる史料としての価値に、日本のみならず中国の学界も注目を始めた。汲古書院から我々研究グループの『『夷堅志』訳注 甲志上』(汲古書院、2014)が出版されたのを皮切りに、その翌年には『南宋の隠れたベストセラー『夷堅志』の世界』(伊原弘、静永健編、勉誠出版、2015)が出版され、国内外の『夷堅志』研究者たちが数多く本書に論文を寄稿した。この書籍には、研究代表者である安田真穂の他、研究分担者の一人である福田知可志も、論文を寄稿している。また中国の古小説研究者等も、『夷堅志』が宋代の社会生活の実情を活写し、宋代以降の小説類にも多くの題材を提供している点について積極的に評価すべきであると指摘する。『夷堅志』所載の多くの話が、江南を中心とした南方を舞台にしており、地域性を反映した内容が多く含まれていることから、国際的にも急速に『夷堅志』に対する学術的価値が高まったことも、この研究を進めるに至った背景である。

2. 研究の目的

(1) 『夷堅志』の精読

本研究対象の『夷堅志』は、これまで抄訳は出版されたことがあるものの、あまり小説的価値を認められず、更にはその膨大な巻数(原本は全 420 巻とされるが、現存は 207 巻)のせいもあって日本国内ではやや手つかずの状態にあった。所載の話の一部を取り上げるような研究はあるものの、テキストの問題や他の歴史書や地理志などとの詳細な検討を全体的に行うような研究は、これまでなされてこなかった。

そこで我々研究グループは、まずは研究対象である『夷堅志』のテキストについて、諸版本と校勘することで最善のテキストを再構成した上で、精緻な注を付けつつ全訳をし、それを研究成果として出版することとした。これは 2014 年の『『夷堅志』訳注 甲志上』から続けて出版しているものであり、前回の科研費研究課題の期間中には、同『甲志下』『乙志上』と出版し、今回は引き続き『夷堅志』の精読を進め、その全体像を明らかにすることを目的の一つとした。

(2) 『夷堅志』を再評価すること

これまで『夷堅志』は、歴史学の史料となり得る可能性を内在していたが、その程度は明らかではなかった。我々研究グループは既に、先に挙げた科研費による研究課題「『夷堅志』の総合的研究」(課題番号:15K02445、研究代表者:安田真穂)の研究成果の一部として、『『夷堅志』訳注 甲志下』(汲古書院、2015)と同『乙志上』(汲古書院、2017)を出版済みであるが、その中で『夷堅志』所収の各話について、その内容を歴史書や地理志などと比較検討をした。その研究過程で、各話が歴史に裏付けられた内容であり、決して荒唐無稽なものばかりではないことが分かってきた。更に、前回の科研費研究成果として、研究分担者である福田知可志により「『夷堅志』自序に見える編集者洪邁の態度」(『乙志上』巻末)と題する論文を発表している。この中で洪邁自身が序文の中で「収録した話を六十年以内に限定した」と述べていることについて、福田は話の正確性を高めるための配慮を新たに施した上で、従来の古小説との差別化を図っていると指摘した。

そこで、今回の研究課題では、この洪邁の、話の正確さを追求するという編集態度が、その他の歴史書などとの程度関係性があるのかについても、更に詳細に調査を進めたいと思った。また、所収の話の小説的価値についても、『夷堅志』精読を通して、これまでの「志怪小説」の枠組みにとらわれずに、『夷堅志』独自のこだわりについて解明していくことで、他の小説集とは違った新しい価値や再評価を加えられればと考えた。

3. 研究の方法

(1) 研究会の開催

四年間の研究期間の内、最初の二年間は通常通りに毎月二回程度、『夷堅志』研究会を開催し、研究分担者等と共に、『夷堅志』の各巻を分担して精読を続けた。

① 平成 30 年度(計 23 回)

4/7, 4/21, 5/19, 6/2, 6/23, 7/14, 7/21, 8/4, 8/30, 9/8, 9/22, 10/13, 10/20, 11/10, 11/24, 12/15, 12/28, 1/12, 1/26, 2/2, 2/23, 3/2, 3/16

平成 31 年度、令和元年度(計 20 回)

4/6, 4/30, 5/4, 5/25, 6/8, 6/29, 7/20, 7/27, 8/1, 8/8, 8/26, 9/14, 9/28, 10/5, 10/19, 11/16, 12/14, 12/27, 1/25, 2/15

しかしこれ以後は新型コロナウイルスの感染拡大状況を鑑み、対面での研究会を取り止め、自粛期間中には、各担当巻の内容について各自で原稿を作成し、精読を進めていくこととし、集まった意見交換については、一旦、止めざるを得ない状況となった。

その後、思った以上にこのコロナ禍が長引き、これではグループでの研究が進まないことに危機感を覚え、IT を活用した新しい研究の方法を模索した。その結果、これまでの対面での研究会に代え、メールにてまずは担当原稿を送り合い、次にそれに対する各自の意見を全員宛に送り合うという方法で、各自の意見をそれぞれに共有できるようにした。その上で、ある程度意見が固まってきた段階で、『夷堅志』の 1 巻毎に 2~3 度の頻度で Zoom にてオンライン研究会を行うことにした。

令和 2 年度と令和 3 年度は、コロナ禍による自粛という行動制限がある中で、これまでのように対面での研究会を実施することが非常に困難であったが、Zoom 等の活用により、画面越しに互いの意見を交換し合って原稿をまとめていくという、新たな研究会のあり方を生み出すことが出来た。これにより遠隔地にいる研究者たちとも、集まること無くスムーズに意見交換ができることが分かった。これは今後の様々なグループ研究活動にとって、新しい研究の形、新たな発展となったといえる。

(2) 原稿作成

研究会を通じて、以下に示すような方法にて精緻な『夷堅志』の訳注原稿を作成した。その上で、その研究成果を公刊した。

① 『夷堅志』諸本のテキスト校勘

国内外の 15 種のテキストを蒐集し、テキスト校勘作業を通じて、最適と判断できる本文の再構築を試みた。そして更に、これらの校勘作業を通して、諸版本の伝播や関係性について考察した。

今回、校勘に使用したテキストは以下の通りである。

- ・『夷堅志』八十巻。静嘉堂文庫所蔵。宋刊元修本。
 - ・『新編分類夷堅志』五十巻。京都大学附属図書館近衛文庫所蔵。
 - ・『新訂増補夷堅志』五十巻。名古屋蓬左文庫所蔵。
 - ・『新刻夷堅志』十一巻。国立公文書館内閣文庫所蔵。支志・三志を収載。
 - ・『夷堅支志』五十巻。『文淵閣四庫全書』一〇四七冊収載。
 - ・『夷堅志』二十巻。国立国会図書館所蔵。支志・三志を収載。
 - ・『夷堅甲志二十巻・乙志二十巻・丙志殘十九巻・丁志二十巻』、『宛委別藏』収載。
 - ・『夷堅甲志二十巻・乙志二十巻・丙志二十巻・丁志二十巻・支甲十巻・支乙十巻・支丙十巻・支丁十巻・支戊十巻・支庚十巻・支癸十巻・三志己十巻・三志辛十巻・三志壬十巻』、『續修四庫全書』一二六四 一二六六冊収載。
 - ・『夷堅甲志・乙志・丙志・丁志』八十巻。『百部叢書集成』七六『十萬卷樓叢書』収載。
 - ・『夷堅志補遺』五十巻。『筆記小説大観』四十編収載。
 - ・『夷堅志』一卷。『舊小説』丁集収載。国立国会図書館関西館所蔵。節本。
 - ・『新校輯補夷堅志一百八十巻・志補二十五巻・再補一卷・拊校勘記一卷』。上海商務印書館函芬樓刊。中文出版社景印本。(なお、張元濟の校記に示される明鈔本(旧商務印書館函芬樓所蔵)と清、嚴元照校本『夷堅志』については、確認できないのでそのまま引用することとした)
 - ・『夷堅志』一卷。『歴代小説筆記選』所載。国立国会図書館蔵。
 - ・『夷堅志』五十巻。『筆記小説大観』、上海進歩書局、石印本。京都産業大学図書館小川文庫所蔵。支志・三志を収載。
 - ・『夷堅志』中華書局。
- (なお詳細については、『夷堅志』訳注』(汲古書院)の凡例にも記載。)

詳細な注釈

『夷堅志』各話の内容について、『建炎以来繫年要録』『宋會要輯校』『宋史』などの歴史書の他、『輿地紀勝』『淳熙三山志』『咸淳臨安志』『雍正浙江通志』『乾隆江南通志』などの地理志や、その他の様々な書籍と照合させた。また完本でないテキストの収録の有無および『汴京句異記』や『榕陰新檢』など、一部の作品を収めている書籍に関して、その巻数などについても記した。また今回、このコロナ禍の影響を受け、中国関係の書籍を扱う書店が、四庫全書や中国地方誌をはじめ様々な書籍について電子書籍化し、それらを月額料金にて使用できるサービスを開始した。本研究期間の最後の1年のみ、この電子検索システムを利用することができた為、日本国内では見られなかった書籍までもが一括一字検索できるようになり、注釈を付ける作業が格段に精度を増し、より緻密で詳細に各話の内容を理解することができるようになった。

全訳

諸テキストを校勘することによって、最適と判断される本文を再構成し、その本文について、詳細な注釈によって得られた情報を反映させた上で、宋代という時代背景を加味した全訳を作成することができた。

分類項目

『太平広記』の分類を元に、この『夷堅志』の内容についてその内容に関わる項目についてピックアップし、各巻末に付することで、文学以外の研究者にとっても使い易い史料となるように配慮した。その際、『太平広記』の分類は、話の最も関係する一項目のみによって分類されていたが、今回の研究においては、その話に登場する要素を複数取り上げていることで、一層細かい分類項目の検索が可能になったと自負している。但し、項目を挙げるに際しては、要素を全て取り上げると却って煩雑になることを危惧し、ある程度は絞ってある。また、『太平広記』の分類には設けられていなかったが、『夷堅志』において多く見られたような事柄については、今回、新たに分類項目を設けた。

巻末索引

これら『夷堅志』の詳細な注釈と全訳などについて、研究成果の一部として『『夷堅志』訳注』を出版する際に、巻末に「人名・地名・分類項目」の索引を付した。これにより、文学のみならず、広範囲の分野の研究に資するよう配慮した。

(3) オンラインの有効活用

今回このコロナ禍において、研究開始当初は予期していなかった様々な制約が課せられた。例えば中国へ資料調査に行くような活動は、控えざるを得ない状況となった。また、これまで月に1回から2回程度開催していた研究分担者や研究協力者たちとの研究会も、対面での実施は困難となった。当初は、コロナ禍が終息するまではと自粛していたが、次第に長引く様相を見せた為、何とかして研究グループ全員が集まらなくとも研究を進めていく方法を模索した。

そこで大学の授業でも利用していたZoomなどのオンラインツールを利用して、画面越しに対面での研究会を何度か開催することにした。先に各巻の担当者から研究グループ全員にメールにて原稿を送信しておき、一定の期間の間に各自でその原稿内容について調査する。その後、その調査結果を元にした変更案や問題点を相互にメールで送り合い、再び期間を設けた後で、Zoomにて顔を合わせながらその場で問題点を一つ一つクリアにし、全体の最終調整を行った。

4. 研究成果

(1) 全訳注本『『夷堅志』訳注』の刊行

最も重要な成果は、『『夷堅志』訳注 乙志下』(齋藤茂・安田真穂・田淵欣也・福田知可志・山口博子訳注、汲古書院、2018)と同『丙志上』(同、2020)を、出版できたことである。これまで『夷堅志』の抄訳本はあったがこのような全訳注本は日本では出版されたことが無く、『夷堅志』甲志から丁志までを網羅的に歴史書や地理志などと比較検討した書籍は無かった。これは本邦初の『夷堅志』の全訳注書である。この全訳注本は、文学に留まらず、歴史学や民俗学などの分野からも、大変注目が集まっており、多岐に渉る分野の学界の発展に大きく資する研究成果であると言える。このシリーズは全8冊を予定しているが、すでに日本国内の多くの大学図書館にて所蔵して頂いている。更にこの科研費に採択していただく前の実績であるが、シリーズ第1冊目となる『『夷堅志』訳注 甲志上』(汲古書院、2014)の再版がすでに決定しており、2022年内には出版できる予定である。これは、本研究成果が、国内外において認められた証拠に他ならない。

更にこの期間には間に合わなかったが、現在、同『丙志下』も、2022年内に出版する予定にしている。この『『夷堅志』訳注』シリーズは、日本のみならず、国内外の学術学会の発展に資する大きな成果となると自負している。

(2) 論文発表、口頭発表など

研究対象である『夷堅志』を精読していくことを通じて得られた様々な情報を元に、これらの研究成果を論文や学会などにて研究発表することで、社会に資するようにした。

特に、『夷堅志』の史料的价值については、同じ南宋の李心傳による『建炎以来繫年要録』を例に、本研究の研究分担者でもある田淵欣也が『『夷堅志』訳注 乙志下』の巻末において『『夷堅志』と『建炎以来繫年要録』』を論じた。『建炎以来繫年要録』は、史官を歴任した李心傳が著した歴史書であるが、その編纂に当たって多くの典籍を用いており、『夷堅志』からも多くの文章を引用している。洪邁自身、その『夷堅志』の序に「天下の怪怪奇奇尽く是ここに萃れり」と公言するほどの志怪小説集ではあるが、『建炎以来繫年要録』では、他の歴史書と同じように、『夷堅志』の文章をかなり積極的に引用し、考察の材料としていることを論の中で指摘した。『夷堅志』をそのまま本文に引用している箇所や、『夷堅志』の志怪的な内容部分を削って、史実と見做しうる部分のみを断片的に取り上げている箇所などがあることを明らかにした。

更に、『夷堅志』の各話の内容について分類項目を設けたが、その際、『太平広記』の分類項目を踏襲しようとしても、必ずしも『夷堅志』には当てはまらないものがいくつか出てきた。それらについては新たな項目を設けるなどしたが、これこそが『夷堅志』のこれまではない洪邁の新しい着眼点とも言えるだろう。更にはその過程で、分類の名称として当てはまったとしても、その話の内容に『太平広記』とは違う変化が見られることについても、新しい気づきがあった。その一つが「異人」の項目である。そこで本研究代表者でもある安田真穂は、『『夷堅志』にみる異人』と題する巻末論文(『『夷堅志』訳注 丙志上』)を寄稿した。その中で「異人」は、唐代伝奇小説に現れるような、どこからともなくやって来て不思議を起こすような人ばかりではなく、宋代という商業が発展した社会背景の中で、市民生活に変化が表れた影響を受け、街の市場で異能を商売道具とするような「異人」が、『夷堅志』所収の話の中に記載されていることを論じた。また本論文にて、「異人」は特別な人だけに与えられた能力ではなく、「異人」に出会うことによって何らかの能力を与えられ、ある日突然「異人」になる普通の人々の存在についても指摘した。

この色々と制限の多かったコロナ禍においても、研究を止めること無く、意欲的に『夷堅志』研究を推し進められたことは、十分に評価に値すると考えている。

(3)今後の展望

今回は、新型コロナウイルスの感染拡大と時期が重なり、研究を進める上で様々な制約を課せられ、前回の平成 27 年度～平成 29 年度に採択された『『夷堅志』の総合的研究』(課題番号:15K02445、研究代表者:安田真穂)とは全く状況が違っていた。これまで毎月2度は集まって『夷堅志』を精読する研究会を開催していたが、それも自粛に追い込まれた。また、文献を調査する為に中国へ資料収集しに行くこともできず、また大学図書館が閉館されるような事態にもなった。しかし歩みを止めること無く、このコロナ禍中でもまずは各自で研究を推し進め続け、IT 技術の活用によって、遠隔地に居ながら顔を合わせての意見交換ができるように工夫を重ねた。このコロナ禍があったからこそ、Zoom による研究会の開催や、電子書籍による検索システムの導入など、新しいツールを手に入れることができたとも言える。これらの IT 技術は、今後コロナ禍の終息後も積極的に活用していきたいと考えている。

また更に今後は、これまでの研究成果を活かしつつ、『『夷堅志』訳注』シリーズを完成させるべく、同『丙志下』(2022 年出版予定)、同『丁志上』、『丁志下』を続刊したいと考えている。そしてその中で、『夷堅志』の中国文学史上における価値を再発見し、これをまとめて更なる研究成果を、学界に発表していきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 安田真穂	4. 巻 丙志上
2. 論文標題 「『夷堅志』にみる「異人」」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『『夷堅志』訳注 丙志上』	6. 最初と最後の頁 305-318
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田淵欣也	4. 巻 23
2. 論文標題 楊家将・楊六郎とその周辺人物について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『都市文化研究』	6. 最初と最後の頁 125-132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 福田知可志	4. 巻 58号
2. 論文標題 『玉歴鈔伝』嘉慶十七年凌周文序刊本訳注（八）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『颯風』	6. 最初と最後の頁 100-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田淵欣也	4. 巻 第22号
2. 論文標題 「楊家将の第三世代以降について 楊文廣を中心に」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『都市文化研究』	6. 最初と最後の頁 16-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 田淵欣也	4. 巻 乙志下
2. 論文標題 『夷堅志』と『建炎以来繫年要録』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『『夷堅志』 訳注 乙志下』	6. 最初と最後の頁 289-308
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 福田知可志
2. 発表標題 鱧と鯉－『夷堅志』「松江鯉」と唐代伝奇「薛偉」（魚服記）などの説話との比較
3. 学会等名 第213回宋代史談話会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 福田知可志
2. 発表標題 鱧と鯉－『夷堅甲志』「松江鯉」を「薛偉」などの説話・史料と比較して
3. 学会等名 第213回宋代史談話会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 齋藤茂、安田真穂、田淵欣也、福田知可志、山口博子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 汲古書院	5. 総ページ数 346
3. 書名 『夷堅志』 訳注 丙志上	

1. 著者名 齋藤茂、安田真穂、田淵欣也、福田知可志、山口博子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 汲古書院	5. 総ページ数 335
3. 書名 『夷堅志』訳注 乙志下	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	福田 知可志 (FUKUDA CHIKASHI) (00747214)	大阪市立大学・大学院文学研究科・研究員 (24402)	
研究分担者	田淵 欣也 (TABUCHI KINYA) (90747213)	大阪市立大学・大学院文学研究科・都市文化研究センター研究員 (24402)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	山口 博子 (YAMAGUCHI HIROKO)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------